

〔看護学〕
〔原著論文〕

初産婦の母乳育児に関するプロセス

初産婦の母乳育児に関する想像と実践のプロセス —妊娠中から出産退院時まで—

伊藤美穂*1

(*1 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科)

Primiparas' thoughts on breastfeeding from pregnancy to the time of discharge from the hospital

Miho Ito*1

(*1 Department of Nursing, Ube Frontier University)

初産婦に対して、妊娠中から出産後退院までの期間の母乳育児プロセスを明らかにすることを目的とし、妊娠・分娩経過に異常がなく母乳育児を実施している15名に、妊娠後期・出産退院時までの2回、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。データ分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を用いた。分析の結果、妊娠中には【母乳育児を希望する】【母乳育児に対する浅い知識】【母乳育児ができるという根拠のない自信】【母乳育児に対する不安があるが深く考えていない】の4つと、出産後の【想像していた母乳育児とのギャップ】【母乳育児に対して前向きに努力する】【母乳育児ができるか不安がある】【退院後の母乳育児に不安がある】4つの計8つのカテゴリーが生成された。

キーワード：初産婦，母乳，母乳育児，プロセス

Keyword: Primipara, Breast milk, Breastfeeding, Process

1. はじめに

母乳育児の重要性はあらゆる角度から論じられ、世界的にも1970年代頃よりWHOやUNICEFを中心に母乳育児の推進がなされている。

わが国でもそれらの観点から、平成19年3月に適切な支援について検討を行うことを目的とした「授乳・離乳支援ガイド」¹⁾が策定されている。また、平成13年度より実施されていた厚生労働省の「第1次健やか親子21」²⁾の事業内で「妊娠出産に関する快適さの確保」が謳われ、出産後1ヵ月時の母乳育児の割合の増加を課題として取り組みが行われてきた。

「授乳・離乳支援ガイド」では「母乳育児に関する妊娠中の考えについては96%の妊婦が母乳で育てたいと考えている」「子供の出生順位別に見る母乳栄養の割合は、第1子で36.6%と第2子・第3子に比べて低い」という現状が明らかにされており、母乳育児を希望し

ている初産婦は多いが実際に母乳栄養が行えている割合は経産婦より低いことが明らかになっている。

それに加えて「第1次健やか親子21」では平成27年度の終了までに母乳育児の割合を44.8%から51.6%に改善することに成功しているが、96%までは改善できていないということから、妊娠中に希望していても様々な要因で母乳育児を諦めている褥婦が大勢いるということが言える。

先行研究でも、出産後からの母乳育児についての困難感についての研究として、浦越らが「退院後1週間目に初産婦61%が乳房および授乳に関する不安を訴えている」³⁾と述べている。さらに森本らの「出産施設においてはその入院期間は5～7日と短く、不十分な母乳分泌・また育児全般に十分な自信がもてないまま退院する褥婦が多くいる」⁴⁾との研究結果は見受けられるが、妊娠中から出産後に渡って、実際に初産婦が母

乳育児をどのように考え、向き合い実施しているかというプロセスについての研究はみられなかった。

そこで、本研究で初産婦の母乳育児に関する想像と実践のプロセスを明らかにすることで、より良い母乳育児支援の検討を行う上で重要な示唆を得ることができると考え、研究に取り組むこととした。

2. 研究目的

妊娠中から出産後退院するまでに、初産婦が母乳育児に対してどのような考えを持ち、実施しているかプロセスを明らかにすることで、母乳育児の継続支援について示唆を得る。

3. 研究方法

3.1. 研究対象者

対象は、研究承諾の得られた病院で分娩を行う初産婦とし、正常な妊娠経過をたどり、産後に母児分離等で直接母乳を児に吸啜させることができない者を除いた15名とした。

表1 研究対象者の概要

対象者	年齢	里帰り分娩	出生体重 (g)	入院中のトラブル	退院時の授乳方法
A氏	31		3044	乳汁分泌不足	混合
B氏	30		3024	乳汁分泌不足	混合
C氏	30	里帰り分娩	2992	問題なし	母乳のみ
D氏	36	里帰り分娩	2730	乳汁分泌不足	混合
E氏	26		3082	乳汁分泌不足	混合
F氏	26		3028	乳房緊満	混合
G氏	31		3096	乳汁分泌不足	混合
H氏	18		4006	扁平乳頭	混合
I氏	34	里帰り分娩	3044	扁平乳頭	混合
J氏	29	里帰り分娩	3376	扁平乳頭	混合
K氏	25	里帰り分娩	3012	問題なし	母乳のみ
L氏	20		2330	問題なし	母乳のみ
M氏	31	里帰り分娩	3130	乳腺炎	母乳のみ
N氏	31	里帰り分娩	3010	乳頭長い	混合
O氏	33	里帰り分娩	2652	乳汁分泌不足	混合

3.2. データ収集方法

2015年6月から10月に、半構造化面接による調査を行った。面接は1回30分程度とし、分娩を控え母乳育児に関する妊娠中の考えが聞ける時期である妊娠35週時と、退院を控え入院中の母乳育児に対して振り返る時

期である産後5日目の計2回行った。個人のプライバシーを確保できる個室で面接を行い、対象者の了解を得てICレコーダーに録音した。

3.3. 分析方法

面接から得られたデータは個人が特定できないよう記号化し、研究者が逐語録に書き起こしインタビューデータ(以下データとする)とした。データ分析方法は修正版グランデッド・セオリー・アプローチ(以下 M-GTA 法)を用いた。木下⁹⁾が提唱する M-GTA では、データに照らし合わせて分析焦点者、分析テーマを設定し、データを基に概念生成を行う。

本研究の分析焦点者は、研究参加者である「母乳育児が可能な初産婦」とし、分析テーマは「母乳育児に対するプロセス」とした。設定した分析焦点者と分析テーマに照らして、逐語録から着目した箇所を抜き出し、着目したデータの意味を検討し概念生成を行った。同時並行で他の類似する、あるいは対極するデータにも着目し検討した。生成した概念に関するデータが豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断し、採用しなかった。複数の概念が生成された段階から概念間の個別的相互関係の検討を行い、概念の生成、統廃合を行いながら、複数の概念からなるカテゴリーを生成した。概念とカテゴリーの相互関係を分析検討し、結果図としてまとめ、そのプロセスを説明するストーリーラインを作成した。

4. 倫理的配慮

本研究は、実施病院と研究者が所属していた山口県立大学大学院の生命倫理委員会の承認(承認番号 27-29号)を受けた。対象者には研究の目的や方法、参加の任意性と撤回の自由、研究参加の利益と不利益等について口頭と文章で説明し、同意を得た。また、本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

5. 結果

対象者は、15名であった。年齢・里帰り分娩者・児の出生体重・授乳状況等については表1のとおりである。分析の結果、20の概念と8つのカテゴリーが生成された(表2)。カテゴリーは【 】、概念は〈 〉、対象者の語りは斜体で表す。概念とカテゴリーの関係を初産婦の母乳育児のプロセスとして結果図に示した(図1)。□はカテゴリー、■→は思いの変化を意味する。結果図に沿って、カテゴリーと概念の関係、プロセスのストーリーラインを説明する。

5.1. カテゴリーと概念の関係

5.1.1 【母乳育児を希望する】カテゴリー

初産婦は妊娠中、人により思い入れの差はあるが、「母親として当たり前の事っていうか、産んだらするものって。(K)」や「祖母も母も完全母乳だったっていう風に聞いたので、自分もそうなのかなって漠然と思っているくらいなんですけど…(C)」といった〈母乳をあげるのは当たり前〉という考えや、「ミルクよりは直接お母さんと繋がっている感じがするのと、うちの母親とかも言ってたんですけど、おっぱいをあげてる時が一番幸せを感じるのかなって…友達も言ってたんですけど見つめ合いながら母乳をあげれることは結構幸せって…(A)」との〈母乳育児に対する憧れ〉を抱き、研究参加者全員が母乳育児を希望していた。

5.1.2 【母乳育児に対する浅い知識】カテゴリー

妊娠中の初産婦は、「免疫力がつくとかそういうのも読んだし、あとは母と子のコミュニケーションにもなるってい

うのも読んだし。イメージは良いですね、母乳育児。(I)」というように〈母乳育児に対する利点〉や、「姉から『母乳あげたら体重がすぐ戻ったよ』って聞かされて。美容というか…体重のことは言っていました。(B)」や「母乳の方が安上がりって…経済的だし、まあ、いつでも出ればさっとあげれるし、母乳が便利そうだなーっていう感じ。(D)」などの〈母乳育児が自分にとってメリットになる情報〉についての知識を持っていた。

一方で、「自分が母乳を2歳まで飲んでいたら聞いてたけど…なんか、そこまで飲まさないといけないのかな?とか。(O)」や「2~3時間毎とかなんですよね?授乳って。なので、自分もやってみないと分からないんですけどなんかその、夜はまとめて寝れないって体力的に昼間どうなるんだろうとか、寝れないことでその、なんかストレスっていうか、そういうのがあるのかなって…(B)」などの〈母乳育児が自分にとってデメリットになる情報〉についても知識があった。

表2 カテゴリーと概念

カテゴリー	概念
母乳育児を希望する	母乳をあげるのは当たり前
	母乳育児に対する憧れ
母乳育児に対する浅い知識	母乳に対する利点
	母乳育児が自分にとってメリットになる情報
	母乳育児が自分にとってデメリットになる情報
母乳育児ができるという根拠のない自信	母乳は出るものだ
	妊娠中のケアを行う必要性を感じない
母乳育児に対して深く考えていない	母乳が出るかどうかの不安
	母乳を吸わせられるか不安
	母乳が出なければ混合育児でも構わない
想像していた母乳育児とのギャップ	授乳手技の難しさに悩む
	妊娠中に知識を得なかったことを後悔する
母乳育児に対して前向きに努力する	授乳指導を受け理解を深める
	軌道に乗り始め頑張ろうと思える
	搾乳で乳汁が出ることを実感する
母乳育児ができるか不安がある	授乳指導を受けても上手くできない
	他人との授乳状態を比べて落ち込む
	直接吸啜させることによって乳房に痛みが出現する
退院後の母乳育児に不安がある	退院後の直母量測定ができない不安
	授乳手技を一人でしていかなければならない不安

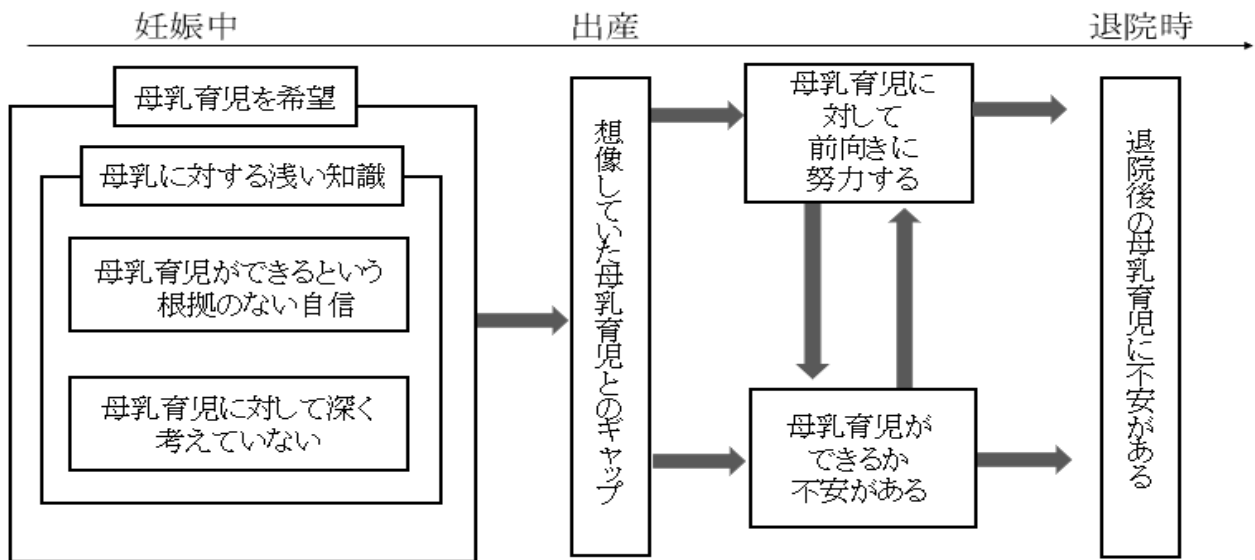


図1 初産婦の母乳育児に関するプロセス結果図

5.1.3 【母乳育児ができるという根拠のない自信】カテゴリー

妊娠中の初産婦は、母乳育児に対して知識が不確かであるが、「妊娠してから胸が大きくなったから『あ、じゃあ、あんた母乳出るよ』みたいな感じで周りの人が言ってくれるから。あ、じゃあ出るのかなーって。

(J) や「自信はないけど、生物として生まれ持った機能があるのかな？って。機能的な面…出るもんだって思ってた。(I)」という〈母乳は出るものだ〉という考えを持っていた。そのため、母乳が出やすいようにケアすることはなく、「何もしてないです(笑う)はい。助産師からの指導もなかったです。(K)」、「全然ケアしてないですね(笑う)言うだけ言っというて全然何も。

(M) と〈妊娠中のケアを行う必要性を感じない〉状態であった。

5.1.4 【母乳育児に対して深く考えていない】カテゴリー

根拠のない自信がある者とは別に、「出るのかな…っていうのが最大の悩みであって…。(A) や「おっぱいって出ないことってあるんですかね？出たらいいですけどね、自分が…。(F)」などの〈母乳が出るかどうかの不安〉や、「不安はありますね。吸ってくれなかったらどうしようとか…。(I)」などの〈母乳を吸わせられるか不安〉とを考えていた者もみられた。

不安があるが、「でもあんまり出なかったらミルクを足すしかないんだろうな…って思ってるくらいです。

(C) や「もし自分が母乳が出なかったらやっぱり…ミルクだけ？になってしまうので、母乳はできればに

なるのかなって。(F)」など、〈母乳が出なければ混合育児でも構わない〉と深く考えていない者もいた。

5.1.5 【想像していた母乳育児とのギャップ】カテゴリー

実際に母乳育児を経験するようになると、初産婦は「思ったより、スムーズにいかないなって思いましたね。もっと赤ちゃんって、最初から吸うものかと思ってたけど、意外と自分のおっぱいは違ったみたい。(J) や、「すごい自分がするのと、してもらうのとは違うなって…最初は抱き方が難しいなって思って…。

(F)」、などと〈授乳手技の難しさに悩む〉ようになっていた。

授乳手技が自分自身で思うようにできないことから、「妊娠中は母乳にはなんか目がいかないんですよ、とにかく、里帰り出産の帝王切開だったし、帝王切開になるんだったらあんな分娩第1期が何時間でどうとかあんなの無視して母乳に目を向けておけば…って感じですよ。(D) や、「前もって吸いにくいタイプじゃないって助産師さんみんなに言ってもらったけど、実際困ってるから前もって聞ける機会があれば違ったのかなって…妊娠前にもうちょっと助産師さんとかに直接みてもらってアドバイスをもらったら良かったかなって思って。結局産まれるまで誰にも見てもらってないから、もうちょっと知識を得ればよかったかなって思って。(O)」など、〈妊娠中に知識を得なかったことを後悔する〉ようになっていた。

5.1.6 【母乳育児に対して前向きに努力する】カテゴリー

【想像していた母乳育児とのギャップ】を認識した

のち、「助産師さんに『こっちの方がいいよ』って言われたのを自分でやってみたら、そっちの方が深く吸い付かせることができるもんなんだなーと。自分で納得したという感じでしょうか？(C)」など、助産師からの〈授乳指導を受け理解を深める〉ようになっていった。そして「今、助産師さんに教えてもらったことをする。すぐにはできそうになくなって、時間がかかりそうだけど、頑張る。(H)」や、「最初、授乳した時、ミルクも考えていたんですが、ほとんど今は母乳で結構飲んでくれるし、ミルクの考えは前より薄いですね。

(L)、「このペースで頑張ればもうちょっと出るようになるだろうという気楽な。取りあえず、次の母乳外来に来るまで家で頑張ってみよう。(N)」など、母乳育児が〈軌道に乗り始め頑張ろうと思える〉ようになっていった。

また、直接母乳を吸啜させることが困難な者も「搾乳が良かったなーって思う。ちゃんと絞ったら出るから。それをしないと出てるかどうか分からなかったから。それをして、自分がどのくらい出るかというのがわかったから。(H)」のように直接母乳が吸啜できなくても〈搾乳で乳汁が出ることを実感する〉ことで、努力をしていこうと考えるようになっていった。

5.1.7 【母乳育児ができるか不安がある】カテゴリー

入院中、「最初どうしていいのかも分からないし、自分でこうしてみても別におっぱいも出ないし、ただ本当に初体験で言われてやって…だからなんの成果も出ない訳じゃないですか(G)」と〈授乳指導を受けても上手くできない〉初産婦は、「授乳室で3人が一緒になることがあって、多分他の子は飲みよるんやろうな、でもこの子は飲んでないのにただ吸ってるんやろうなって思いながら、早く出ればいいなと思いながら…そうですね…そんな気持ちでいました。(E)」や「結構、性格上、人とたぶん比べちゃう…みんなはできるのに自分ではできないとか結構そんな性格…むしろ個室は最初から考えてなかったんですけど、個室みたいところで落ち着いて2人で周りのお母さんとかの情報もいれずにやると泣くことはなかったかもしれない…。(I)」などと〈他人との授乳状態を比べて落ち込む〉ようになっていた。また、児の吸啜が上手に行えていないことにより、乳頭亀裂・乳房緊満などのトラブルが発生し、「痛い時って、ちょっと治るの待ちたいとか、そんなすぐに治らないけど、痛いと思いながら、でも、言ったら駄目よなと思いながら。なんか、赤ちゃんが聞いてそうだし、でも、言っているけど、極力言わない

ようにしているけど、ああ、痛たたみみたい、飲まなくなったら困るし、取りあえず、うーみたいな。(J)」や、「痛かったですね。痛かったのと、おっぱいあげるのが、こんなに面倒くさいものなのかという。くわえられると、痛いから、嫌と思うけど、自分のためじゃなくて、赤ちゃんのためにあげなきゃ。(M)」などの〈直接吸啜させることによって乳房に痛みが出現する〉ことで不安が出ることもあった。

さらに、入院中少しずつ母乳育児が〈軌道に乗り始め頑張ろうと思える〉者でも、「指導が為にはなかったけど、でも、自分でちゃんと習得できて無いなーって思います。習得が…(笑う)多分それは大切な見ないといけない所なんだけど、自分の中でまだはっきりわからない…わかってないっていうか…うん。(B)」といった母乳育児が上手くできない不安を訴える者もいた。

5.1.8 【退院後の母乳育児に不安がある】カテゴリー

退院が近くなってから、「帰ったら母乳量を測る方法が無いな…って。とりあえず1ヶ月健診の時に計ってっていう事なんですよ…。(C)」や、「病院でしか測れないから、家で測れないのは不安なんですけど。(N)」といった〈退院後の母乳量測定ができない不安〉や、「家では一人でしょ。まあ母はいて、食事のこととかやってくれる予定だけど、授乳のたびにわざわざ起きてこないし、私の起きるタイミングで今みたいに仲間がいるわけでもないし『はあ…孤独な闘いか』みたいなそういうイメージはありますね、帰ってからの生活に対して。(D)」や「聞いてもらう人がっていうか、指導してもらう人が…助産師さんがいないからちょっと大丈夫かなーって、またおっぱいが張ったりせんかなーって。(G)」などと〈授乳手技を一人でしていかなければならない不安〉が出現していた。

5.2. ストーリーライン

以上のカテゴリーと概念から、ストーリーラインを説明する。

初産婦は妊娠中、対象者全員が【母乳育児を希望する】と答えていたが、【母乳育児に対する浅い知識】しか得ていない者が多かった。そのため、母乳育児ができるか不安はあるが、【母乳育児ができるという根拠のない自信】を持つ者と、【母乳育児に対して深く考えていない】という者に分かれていた。

出産後は、初産婦すべてが【想像していた母乳育児とのギャップ】に衝撃を受けていた。その後、【母乳育児に対して前向きに努力する】ことで、徐々に知識を得るが、授乳指導を受けても上手くできない時には【母

乳育児ができるか不安がある】。

入院中は【母乳育児に対して前向きに努力する】、【母乳育児ができるか不安がある】の2つのカテゴリーを行き来しているが、退院を目前にすると、【退院後の母乳育児に不安がある】状況となる。

6. 考察

今回の研究で、初産婦の妊娠から出産退院時までの経過に沿った母乳育児に関するプロセスと助産師に行える効果的な支援方法について考察していく。

6.1. 妊娠中

本研究の対象者 15 人全員が、妊娠中から【母乳育児を希望する】と語っていた。このことから、妊婦の96%は母乳育児を希望しているという「授乳・離乳支援ガイド」の結果と相違することはなかった。

【母乳育児を希望する】理由としては、〈母乳をあげるのは当たり前〉〈母乳育児に対する憧れ〉が挙げられた。濱田が「初産婦が母乳を子供に与えることは「母親」あるいは女性の「自然」で「当然」の能力とみなし、母乳を与えることはその能力が誇示できるといった感覚やその能力が発揮できることに憧れを抱いている」⁶⁾と述べていることから、初産婦が〈母乳をあげるのは当たり前〉と考えていることが母乳育児を希望する理由であることが明確となった。また、インタビューからは〈母乳育児に対する憧れ〉として、初産婦自身に近い人の母乳育児体験を聞いたり、実際に直接母乳を吸啜させている光景を見ることによって強く示唆された。

さらに、〈母乳に対する利点〉として、「免疫があり、赤ちゃんに良い」「スキンシップによる愛着形成」との内容は広く知られており、初産婦はおおむね母乳育児に対してプラスのイメージを持っていることにより、母乳育児を希望するに至っていると推測される。

〈母乳育児が自分にとってメリットになる情報〉については、「体重が減る」「経済的」などの不確かな知識しか持っておらず、母乳育児に対する知識が妊娠中にインプットされていない状況であったが、自分には〈母乳は出るものだ〉と思い、【母乳育児ができるという根拠のない自信】を持っていることで、妊娠中の乳房ケアを行う必要性を感じていないことが明らかとなった。さらに、本研究では、里帰り出産であった対象者が約半数見られたが、「妊娠中に指導は受けなかった」との発言があり、必要性を感じていない状況の中、助産師が妊娠中に母乳育児に対する指導を行っても、効

果的な指導が行えていない状況であったと考えられる。そのため、妊娠中の母乳育児指導については、ケアの必要性についての意識付けを行ったうえで指導をすることが必要であると考えられる。

一方、〈母乳育児が自分にとってデメリットになる情報〉については「夜間の睡眠不足」が挙げられていたが、特に妊娠中には不安を持たれていなかった。また、【母乳育児ができるという根拠のない自信】を持っている者だけでなく、〈母乳が出るかどうかの不安〉や〈母乳を吸わせられるか不安〉を持つ者もみられたが、それに関しては妊娠中に悩むまではいかず、楽観的でもあった。それらのことから初産婦全員が【母乳育児を希望する】状況を作り出す要因にもなっているのではないかと考えられる。なっていると考えられる。

さらに、「何としても母乳育児で」という考えではない者は、〈母乳が出なければ混合育児でも構わない〉という程度の希望であり、母乳育児について妊娠中は深く考えていない状況であることが分かった。

6.2. 出産後から退院時まで

出産後、初産婦は実際初めて母乳育児を経験してすることで、〈授乳手技の難しさに悩む〉ことになる。直接母乳を児に吸啜させるための正しいポジショニングやラッチオンが授乳指導を受けても自分自身で上手くできないことや、思うように乳汁分泌が増加してこないことで、妊娠中に抱いていた【母乳育児ができるという根拠のない自信】は早期に喪失するとともに、【想像していた母乳育児とのギャップ】に愕然とし、〈妊娠中に知識を得なかったことを後悔する〉傾向が見られた。このことから、妊娠中の母乳育児についての指導が必須であり、〈母乳育児に対する憧れ〉を維持しながら、出産後起こりうる困難について情報提示を行うことや、妊娠中から産後へとスムーズに母乳育児を進められるよう知識を与え授乳手技の指導を行うことが、ギャップの軽減につながると考えられる。

また、初産婦は助産師から入院中に〈授乳指導を受け理解を深める〉。河原らは「母親たちは入院中、医療者がそばについて授乳指導をすることで授乳方法が分かるだけでなく、母親の自信に繋がり、母乳育児へのやる気が起こる」⁷⁾と述べている。このことから、初産婦は「助産師の指導を実施してみる」ことにより、授乳手技に慣れ、上達することによって母乳育児について自信が付き、少しずつ母乳育児が〈軌道に乗り始め頑張ろうと思える〉ようになり、【母乳育児に対して前向きに努力する】ようになっていくことが分かる。

しかし、努力をしても直接母乳を吸啜させることが困難な〈授乳指導を受けても上手くできない〉者は、本研究対象者に多数存在していた。〈授乳指導を受けても上手くできない〉者は、今後【母乳育児ができるか不安がある】状況であったが、直接母乳を吸啜させられなくても〈搾乳で乳汁が出ることを実感する〉支援をすることで【母乳育児に対して前向きに努力する】モチベーションが保たれていることが分かった。このことから、直接吸啜させることだけに力を入れるのではなく、授乳手技を練習させながら初産婦が負担にならない程度搾乳を行うことで、母乳育児のモチベーション維持をさせる必要も出てくると考えられた。

さらに、扁平乳頭・陥没乳頭であったり初産婦自身の手技が未熟なことで、授乳指導を受けても母乳育児が上達しない初産婦は、「みんなはできるのに自分ではできない」と自分と〈他人との授乳状態を比べて落ち込む〉様子が見受けられた。現代の初産婦は、妊娠前から新生児を抱くなどの経験がない者も多く、正しいポジションやラッチオンを出産後から指導するのは効果的に手技を取得できない可能性があることから、今後は、初産婦に対しては妊娠中からの正しいポジションやラッチオンの指導も視野に入れる必要があると考えられる。

また、退院する頃から「家にはスケールがないのでどのくらい母乳を飲むか不安」という〈退院後の母乳量測定ができない不安〉や、助産師からの授乳に対する指導や手助けがない自宅・実家に退院することによって〈授乳手技を一人でしていかなければならない不安〉などが出現し、【退院後の母乳育児に不安がある】という状態になる。これらのことより、母乳育児がスムーズにいつていると思われる症例でも、退院が近くなることで母乳育児に不安が出てくる可能性があることから、初産婦には個別性にあった授乳指導を全例に行う必要があるが、特に扁平乳頭・陥没乳頭や、手技が未熟なことで直接母乳が吸啜させにくい者については、さらにきめ細やかな指導が必要になってくる。

上原の研究では、「初産婦の1ヶ月健診の母親としての自信に有意な関連があったのは、退院時の『うまく授乳できない時の対応』、『授乳時の抱き方・吸わせ方』への自信や、『母乳が足りているかどうか』、『ミルクの量が分からない』という不安や『スタッフによって情報が異なる』ことであった。」⁸⁾と述べられている。このことから、退院後に出現する可能性がある母乳育児に対する不安を払拭させるためには、ある程度、こ

れらの項目が入院中に助産師の指導により解決し、初産婦自身で母乳育児ができるようにし、自信をもって退院を迎える必要がある。

しかしながら、短い入院期間ですべてを習得することは難しいため、退院後の受け皿として、母乳外来・2週間健診・産後ケア事業・新生児訪問等の支援を駆使していくことが求められる。そこでは、初産婦の母乳育児に対して医療関係者がコンセンサスを持ち、継続的に対応することで、情報の違いによって初産婦が惑わされることがないように配慮する必要があると考えられる。

7. 結論

1. 今回、初産婦が母乳育児を実施していくプロセスとして【母乳育児を希望する】【母乳育児に対する浅い知識】【母乳育児ができるという根拠のない自信】【母乳育児に対する不安があるが深く考えていない】【想像していた母乳育児とのギャップ】【母乳育児に対して前向きに努力する】【母乳育児ができるか不安がある】【退院後の母乳育児に不安がある】の8つのカテゴリーが抽出された。
2. 初産婦は、妊娠中に抱いている母乳育児のイメージと現実の母乳育児との間にギャップを感じており、妊娠中に知識を得ていないことを後悔していた。
3. 妊娠中からの母乳育児に対する指導の必要性が明らかとなり、入院中の母乳育児にスムーズに移行できるように支援する必要があるとともに、退院時、母乳育児に対する不安が表出してくることから、引き続き継続的なケアを行っていく必要があるということが示唆された。

8. 謝辞

本研究に参加して下さった初産婦の皆様方、研究協力をご了承していただいた施設長並びにスタッフの皆様へ深く御礼申し上げます。

本稿は2015年度山口県立大学大学院健康福祉学研究所に提出した修士論文を加筆修正したものである。

9. 引用文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課:授乳・離乳の支援ガイド, 2007, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/01/dl/s0131-11b.pdf>, 2021.10.29 閲覧.
- 2) 厚生労働省:「第一次健やか親子21」最終評価報告, <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou>

〔看護学〕
〔原著論文〕

[11908000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Boshihokenka/0000034788.pdf](#), 2021.10.29 閲覧.

- 3) 浦越由利江: 褥婦の不安に関する一考察—産褥1ヶ月までの褥婦に対するアンケートおよび電話相談の分析より—, 岡山県母性衛生学会誌, 4, pp62-66, 1987.
- 4) 森本眞寿代ほか: 助産師の継続支援により「母乳育児の満足度」に関連する要因, 母性衛生 54 (1), pp43-50, 2013.
- 5) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ

の実践, 弘文堂, 2003.

- 6) 濱田真由美: 初産婦の授乳への意思に影響を与える社会規範, 日本助産学会誌, 26 (1), pp28-39, 2012.
- 7) 河原聡美ほか: 母乳栄養率・母乳育児支援の出産施設別の比較と母親が望む母乳育児支援の検討, 母性衛生, 54 (2), pp317-324, 2013.
- 8) 上原諒子ほか: 産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連, 奈良県立医科大学看護学科紀要, 13, pp48-56, 2017.